

希望を秘めた病理:アダム・シャッツへの応答

アブダルジャワド・オマール（西岸地区のベルゼイト大学博士課程在学及び同大学の非常勤講師）著、脇浜義明訳、田中一弘・大賀英二補訳 *脚注はすべて訳注

Mondoweiss, 2023年11月8日

欧米の知識人たちが10月7日におけるパレスチナの暴力の「復讐に燃えた病理」に不快感を示すとき、彼らはその根底にある軍事的、戦術的、政治的な原因を無視している。



フランスの小説家ルネ・ペランが1802年に発表した小説『帽子の焼却、あるいはトゥーサン＝ルヴェルチュールの治世』("the incendie du cap, ou le règne de toussaint-louverture")の扉絵。ハイチ革命を否定し、その指導者であるトゥーサン・ルヴェルチュールを攻撃するプロパガンダ作品となり、ペランはそのトゥーサン・ルヴェルチュールを「残虐な黒人」と表現した。この挿絵には、罪のない白人（その多くは女性や子供）の無慈悲な虐殺を統率する、身なりの良いトゥーサン・ルヴェルチュールが描かれている。PHOTO: RACE.ED/UNIVERSITY OF EDINBURGH

『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』誌に掲載されたアダム・シャッツ (Adam Shatz) の論文「復讐に満ちた病理」(Vengeful Pathologies) が広く読まれている。この論文は、脱植民地化の原則とそれに伴う騒動を弱体化させようとして、歴史のアナロジーと偽りの比較を複雑に織り交ぜた物語を展開したものである。主たる論点は三つに集約できる。第一に、復讐がイスラエル人とパレスチナ人の間の相互作用の主要な様式となり、両者は根本的本能として「復讐の病理」にかかっているという主張。第二に、彼が「脱植民地化支援左翼」(decolonial left) と呼ぶ左翼の批判で、彼らが脱植民地化闘争を行っているゲリラが犯す戦争犯罪に対して目を閉じるばかりか、民間人殺害を子供みたいに賛美すると非難する。第

三に、彼の議論の中でもっとも重要な点であるが、10・7攻撃の残虐な事実を強調し、10・7攻撃とアルジェリア独立闘争のときに起きた出来事、フィリップヴィルの闘いと類似点をあげ、それが西洋社会におけるファシスト台頭に貢献すると指摘している¹。

この論文は西側知識人が迷い込んでいる知的迷路を典型的に表したものである。それは、米国と同じように成功した入植植民地事業に関する記録文書の脚注に、パレスチナ人を「やむを得ない必要な犠牲」と決めつけ記す程度の扱いをするものだ。だから、パレスチナ人への同情は、入植植民地主義の画一的な機構に対する立ち向かえないという認識を前提として、表現される。これは奇妙なことではないだろうか。遠く離れた安全なところから、悲劇的な映画を観て同情することで、善行を行ったとひそかに自己満足する姿勢だ。イスラエルの絶対的優勢と支配は西側知識人を気分良くさせる同情の強力な触媒として機能する。西側知識人の親パレスチナ姿勢は「あなたたちが悲劇的な犠牲者であり続け、地獄のような悲惨に落ちている限りにおいて、私たちはあなたたちとともにある」とささやくような、一種の疑似連帯を表現して、ハッピーな気分になっているのだ。パレスチナ人に対する同情は、彼らが悲劇的な現状を維持することにかかっていると議論する平和主義者もいるかもしれない。

パレスチナ人の身の毛もよだつ悲劇は、ありがたいことに、はるか遠方で起きている。遠くで行われていて、心地よく消費されるショーである。この態度が西側知識人のパレスチナ人への関わりの不気味な限界として、彼らの知的活動の中にあらかじめ刻み込まれている。

だから、今回のアル・アクサ洪水のように、積年の抑圧的運命を打破しようと被抑圧者が立ち上がったとき、彼らは狼狽し、分裂症的反応をする。かつて私たちの窮状に嘆き悲しんだ知識人たちは、今や引き裂かれている。多くは道徳的説教をするお巡りさんのように振る舞い、暴力非難のバトンを振り回す。それ以上に重大なのは、いわゆる「ガザ包囲地区（ガザとの境界付近にイスラエルが作った入植地やキブツ²）でハマス等が行った10・7作戦に関して、イスラエルが煽情的にフレームアップして流したデマをナイーブに信じ込んで、テロだと批判する者もいる。

他にも、無関心を装い、沈黙する知識人もいる。これは西側世界で暮らすパレスチナ人知識人や歴史研究者の間に多く見られる。以前はガザや西岸地区のパレスチナ人に共感する集団的声を発していたが、今では被抑圧者の反乱を戒めるような訓戒的発言をする者さえ出てきた。反乱を野蛮で、未開人のような行動様式で、極右ファシズムを目覚めさせる行為だと言うのである。ジョセフ・マサド（Joseph Massad）のように率直な意見を言うとたちまち糾弾され³、マサドを見せしめにする魔女狩りが始まり、みんな沈黙へと追いやられる

¹ フィリップヴィルの闘いとは、1955年8月26日、FLN（アルジェリア民族解放戦線）と民衆がピエ・ノワールと呼ばれたヨーロッパ人入植者数十人を殺害した事件。これに対しピエ・ノワール自警団は仕返しに数千人のアルジェリア人を虐殺した。

² これらにはパレスチナ人の帰還要求に対する人間の盾という政治的意味がある。

³ ジョセフ・マサドはコロンビア大学のヨルダン人教授である。彼は10月8日に「入植者植民地主義国家イスラエル、パレスチナ人を人種差別する国家に対するレジスタンス」

のだ。

イスラエルの復讐の病理と鉄の壁の打破

イスラエルの歴史物語の迷路を掘り下げると、復讐という暴力病理が単なる一時的感情ではなく、イスラエルの軍国主義体制の中枢部にいつの間にか埋め込まれた病理であることが明白に見える。例えば、トゥルムス・アヤやフワラなどのパレスチナ人町を「値札攻撃政策」(price tag attack policy)で破壊したことを見ればよく分かる。それはシオニストの歴史の中の些細な事件ではなく、復讐がシオニストの手口(modus operandi)となっていることを物語っている。シャッツの言説のパラドックスはシオニストの復讐の病理を誤って解釈しているところにある — イスラエルの復讐病理は単にパレスチナ人の行動や挑発的行為への反応というだけではなくて、通常の原因・結果の理法を超えたものであり、パレスチナ人が「厚かましくも存在している」ことに腹を立てて、その厚かましさに懲罰を課す行為である。イスラエルにとっては、イスラエルの入植地拡大を認め、イスラエルの安全保障と経済的利益に奉仕するパレスチナ自治政府(PA)大統領マハムード・アッバースのようなパレスチナ人でさえ、邪魔者である。実際、PAがイスラエルの下請け機関のように協力した返礼に受け取ったのは、相変わらずの金融制裁とPAの治安上の協力なんか当てにしていけないという隠微な態度であった。

このパレスチナ人殲滅希望はイスラエルの社会機構の中に見えている — 極右宗教シオニストの言動だけではなく、国家政策、及びリベラル派の中にもそれが見える。この決定的な感情を解明することがシオニスト問題の中核に触れることになる。ベザレル・スモトリッチ(Bezlalel Smotirtich)やイタマル・ベン・グヴィル(Itamar Ben-Gvir)のような狂信的宗教シオニストがシオニズムの潜在的な集合的無意識を言葉として表現し、それがすべての党派や一般民衆を含めたイスラエルの集合的意識となっているのである。

シャッツは、近視眼的思考のため、リベラルと言われてきた『ハアレツ』紙(シャッツは『ハアレツ』をイスラエルでは類まれな日刊紙と称賛している)が事態の流れの圧力に押されてプロパガンダ拡声器に変身していることを見抜けなかったのかもしれない。『ハアレツ』の紙面にはパレスチナ人への仕返しと戦争拡大を奨励する記事で溢れていたにもかかわらず、である。建国後75年経過したのに、イスラエルは建国時に犯した根本的な犯罪 — パレスチナ人の民族浄化 — を今なお繰り返している。18000トンもの爆弾を世界一人口密度の高い小さな地区にどンドン落とし込むのは、10・7攻撃への反撃をはるかに超える軍事行動である。イスラエルは、入植殖民主義と軍事占領という現状に敢然と挑戦する世界を断固許さないという狂気を武器化して、民族浄化を一步拡大しているのである。

イスラエル人が叫ぶ「アラブ人に死を」はこの民族浄化という国家ドクトリンを表すばか

と「電子インテリファダ」に書いたことで、学生から「テロリスト支援者」と非難され、嫌悪すべきハマスの攻撃をマサド教授が称賛するのは大学内外に誤った情報を流し、暴力を奨励しているので、大学から追放せよという要請文が提出された)

りでなく、注目すべきことに、米国の地政学とぴったり一致する。シャッツは、自らの偏見と、おそらく『ハアレツ』への親近感に影響されて、批判的理性が働かなくなり、イスラエルの政治、イスラエルにおけるユダヤ人中心のアイデンティティ政治の複雑な作用を見抜けなかったのだろう。彼はイスラエルの軍事行動はパレスチナ人の抵抗への反撃だと解釈する、あきれ果てる間違いを犯している。実際には、パレスチナ人の抵抗は、デモ、集会、PA外交、武装抵抗など様々な形で展開されるが、それらは長期に続くイスラエルの武力占領と民族浄化への弁証法的アンチテーゼであって、必ずしもイスラエルの野蛮な虐殺や破壊行動の鏡像ではない。このダイナミクスを理解するためには、シオニズムの「アラブ問題」に関する中心的な考え方を検討する必要がある。

ゼエヴ・ジャボチンスキー (Ze'ev Jabotinsky) のようなシオニズムの創始者たちは、パレスチナのアラブ人を犠牲にしてユダヤ人国家を作るために犯さなければならない「必要悪」に関してははっきりした考えを持っていた。実際、ジャボチンスキーの『鉄の壁』⁴が今のイスラエルの軍事ドクトリンの基礎となっている。ジャボチンスキーの思想は軍事力でアラブ人が最終的には受け入れざるを得ないようにする「鉄の壁」を構築することであった。

「鉄の壁」の思想はシオニズムが先住民に対する「ゼロ・サム・ゲーム」 — 「あいつらか俺たちのどちらか」という存在論的方程式 — という結論に最終的には達する。この致命的なサイクルから抜け出すためには、この鉄の壁を解体することが絶対的な必要事項である — 即ち、構造的で政治的な問題に対して常に「軍事的に解決できる」というイスラエルの自信に挑戦することが必要である。10・7暴力抵抗を許容するか非難するかはともかく、10月7日にパレスチナ人が試みたのはまさにそのことである。

パレスチナ人の冒涇とイスラエルの「論理的狂気」

10・7事件を評価する場合は、前から存在する戦闘ルールを考慮しなければならない。その多くは、16年間にわたるガザ封鎖と反乱鎮圧作戦の中でイスラエルが作り上げたものである。また、10・7事件の背景を構成する政治的・社会的要因のすべてを考慮しなければならない。シャッツの論文はその要因の一部に言及しているが、結局パレスチナ人が一種の原始的復讐心で行動したとしておきたいがために、それら歴史的・政治的・社会的要因を投げ捨てたようだ。

シャッツは、10・7攻撃を軍人だけに絞っていたら、「正当性」という見せかけを得て

⁴ 労働シオニストに対して修正シオニストのジャボチンスキーは右派と言われているが、労働シオニストの偽善を暴露し、パレスチナ人は、ユダヤ人と同じく、他者に絶対従属しない誇りある民族だから、彼らを戦争で打ち負かす「鉄の壁」しか方法がない。彼らを負かしたうえで彼らを尊重して共存する道を探そうというのが「鉄の壁」の主旨で、敵対しながらもパレスチナ人の尊厳を認めた数少ない人物。ジャボチンスキー思想の継承者のネタニヤフら修正シオニストは「鉄の壁」の戦争部分だけを継承して、パレスチナ人への尊厳や共存思想を継承していない。しかし、ジャボチンスキー思想は征服者の思想であることには変わりがない。

いたのに、と書いている。民間人殺傷を含まない行動をしておれば、イスラエルと米国がパレスチナ人の抵抗を ISIS と同じ凶悪な冒流的行為だと混同しようとしたイメージが、西側世界の集团的意見になるのを防いだかもしれない、と書いている。このシャツの主張には首肯できない。イスラエルや米国はいかなる反対運動をも冒流的で原始的として「冒流的で原始的」な暴力で弾圧してきたからだ。シャツはそういうイスラエルの軍事的弾圧の歴史を無視している。

例えば、2006年のイスラエル軍のレバノン侵攻を見てもそれが分かる。レバノン側の反撃の対象はイスラエル軍であって、シャツのいう「正当性」のある行動だったが、イスラエル軍は戦士と民間人の区別をしないで攻撃、1200人以上の民間人を殺害し多数の負傷者を出した。同じように、2006年のイスラエル国軍のギルアド・シャリート伍長の誘拐事件も、シャツの枠組みでは「正当性」のある軍事標的を対象とする行動であったが、イスラエル軍は報復攻撃でやはり1200人近くの民間人を殺害した。現実の戦域では軍人。戦闘員、民間人は標的として絡み合っているのだ。

それに、パレスチナ・イスラエル紛争の歴史も米国とイスラエルの言説も、民間人と戦闘員の区別を重要視していない。ヒズボラやハマスは、仮に軍人だけを攻撃対象としたとしても、イスラエルと米国はテロ組織として攻撃する。そしてその攻撃は、彼らだけを標的とするのではなく、無差別攻撃となる。ヒズボラがイスラエル兵を捕らえて殺害したことに対して、イスラエルが実施した「ダヒヤ・ドクトリン」⁵にそれが見られる。

ガザでもダヒヤ・ドクトリンが実施されている。イスラエルがイスラエルに対する重大な挑戦と見做す抵抗運動（非武装・武装にかかわらず）に対して、市民的インフラや公的インフラ等の包括的破壊によって村や町や都市を瓦礫の山とし、「ガザを石器時代にする」と宣言した。つまり、何を標的にしようとパレスチナ戦士が抵抗を行うと、それへの懲罰として空から集中的に爆撃する焦土作戦を行うという宣言なのだ。

とりわけ注意しなければならない点は、イスラエルの過剰な軍事反応（パレスチナ人がシャツの言う「正当性」がある攻撃をした場合でも、同じように過激な軍事反応をする）ではなく、イスラエルの戦闘様式や反乱鎮圧様式が進化したことである。イスラエルが設定したこうした軍事的交戦規則は、10・7を解釈する場合の重要な背景文脈となる。

過去20年間にイスラエルは地上戦を戦争から切り離す戦闘形態、つまり自国の兵士と軍を実際に戦域から遠く離れたところに置いて、自国の圧倒的な空軍力を使用しながら攻撃する方法である。近年のガザ戦争ではもっぱら空爆を用いて。自国兵隊の命を守り、他方で多数のパレスチナ人（そのほとんどが民間人）を殺傷した。2021年には地上軍を送り込むと宣言したが、これはハマス戦士を地下トンネルへ誘い込んで、空爆と地上軍でトンネ

⁵ 2006年のレバノン侵攻中にイスラエル国防軍のガディ・アイゼンコット（Gadi Eizenkot）参謀長が展開した非対称戦争戦略で、民間人の敵対的と見做し、民間人殺害、市民生活インフラも破壊する戦術。

ルを破壊し武装戦士を殺害するという「メトロ作戦」であった⁶。しかし、パレスチナ人はイスラエルがガザ回廊に入ってくれないと思ったので、メトロ作戦は失敗した。実際、過去数年間、イスラエル軍は諜報活動と空爆に依存して反乱鎮圧活動を行う一次元的軍隊になっていた。これはガザの市民生活を破壊するのに効果があったが、パレスチナ戦士に対する軍事活動としては効果に限界があった。

イスラエルは殺される危険を避けて殺す方法を選択したわけである。この戦略的転換によって、パレスチナ武装グループは新たな戦術を開発するように促されたのである。つまり、お前たちがガザへ入ってくれないのならこちらがガザの外へ出てやるという反応をしたのである。クラウゼヴィッツが示したように、戦争というものは本質的に弁証法的に進み、双方が技術的専門知識、決死的意志、組織編制、指導系統、諜報活動を使って有利な立場を取ろうとする「決闘」に近い。10・7はそういう弁証法が働いて起きた面がある。イスラエルが作り上げた戦術的な現状に対する反応であった。

「メトロ作戦」が失敗した翌年2022年にヤイル・ラピド (Yair Lapid) 首相とベニー・ガンツ (Benny" Gantz) 国防相が閣議や議会の承認なしに始めたガザ戦争は、ガザ回廊のレジスタンスが攻撃計画を立てたことから始まったことを理解することが重要である。パレスチナ戦士は幾つかの主要要因を考慮して抵抗計画を立てた。その要因の一つが、イスラエルがガザへの直接侵攻を渋る傾向である。しかし、10・7へ向かったのと同じ政治的・社会的圧力もあった。ガザの酷い生活条件が一向に改善しないことと、PA (パレスチナ自治政府) などが従事している政治的解決がまったく進まないことである。つまり、政治的、外交的、法律的な紛争解決の道が完全に消耗していることである。

イスラエルがPAに財政的制裁をかけてPAの力を弱めていることも、紛争の軍事的解決に向かう傾向を高めた。イスラエル社会と政治舞台で極右が力を伸ばしたこと、狂信的入植者がエルサレムをユダヤ化し、西岸地区で不法入植地が拡大したことも、火に油を注いだ。帰還大行進のようなイスラエルに危害を与えない非武装デモに対してもイスラエル軍と警察は激しい攻撃をくわえ、多数のデモ参加者がスナイパーの犠牲になった。

シャツツはそのあたりの状況を少し述べているが、その意味をまったく理解していない。それどころか、イスラエルの世界における地位 — 象徴的、構造的、物理的暴力を振るっても国際社会から何ら罰を受けない国家 — であることを考慮すれば、パレスチナ人に非暴力抵抗に留まるべきだと述べることは厚顔無恥な期待である。実際、国際刑事裁判所 (ICC) がイスラエルの指導者を戦争犯罪で告訴したとき米国は刑事責任を追及しないように国際刑事裁判所に警告した。また、EUはパレスチナ国家樹立を承認していないし、イスラエルの暴挙に制裁を課すこともしなかった。つまり、世界はパレスチナ人に明確なメッセージを送っていたのだ — 法的救済も政治的救済もない、ただ非暴力的抵抗には限定的な支持を与え、イスラエルの行き過ぎた犯罪行為には時々効果のない非難の声を上げる、というメッセージである。この国際社会の非暴力主張は、実体的にはパレスチナ人への暴力である。何

⁶ 「メトロ」とはハマスの大規模な地下トンネル網のこと。

故なら、それはパレスチナ人に黙って殺されよと勧めているのと同じであるからである。

民間人殺害問題

シャッツは、上述したパレスチナ人に暴力を使うなという先進国左派やリベラルの傲慢な説教を行っているわけではなく、民間人を攻撃すること、10・7の民間人虐殺のような抵抗運動に憂いを感じているのだ、と寛大に見る人もいる。しかし、シャッツはイスラエルが流したデマやプロパガンダを幼稚に信じ込んでいるばかりか、もっと大切なことに、アル・アクサ洪水の背景となる文脈的要素をまったく無視している。

その要素の一つは、イスラエル社会の独特な性格に関連する。イスラエルの国家防衛構造は複雑で重層的で、その一つは軍施設と民間人入植地とが地理的に接近していることである。だから、民間人入植地には軍隊や警察や軍隊に訓練された自警団がたくさんいる。特にガザ包囲地区の民間人入植者が銃を携帯している。パレスチナ人の武装抵抗の戦略を考えると、こういうイスラエル民間人の実態を考慮に入れるべきである。

こう言ったからといって、イスラエル国民のすべてが兵士であり「正当性」のある攻撃対象になると言っているのではないが、これは、西側の軍隊であろうが、東側軍隊であろうが、文明国の軍隊であろうが、野蛮地域の戦闘部隊であろうが、軍事行動をするとき必ず考慮すべき条件で、それに基づいて計画性のある戦術 (a policy of not taking chances) を採る。そもそもイスラエルの焦土作戦 — 実験兵器も含めて様々な火力⁷を使ってガザを絨毯爆撃して、一種の「防火帯」を作ってから慎重に地上軍を侵攻させて、自国兵士の死傷者を減らすイスラエルの作戦 —こそ、その典型である。

ところが、イスラエルはパレスチナの10・7攻撃には戦略的目的などなく、単なる復讐心に燃えて血に飢えた野蛮な襲撃と考えているようだ。シャッツの論文を読んでいると、彼もイスラエルの考え方を知らないうちに内面化しているように思える。より冷静な評価が必要だろう。

手に入る情報に基づいて推測すると、10・7作戦には3つの戦術的目標があったように思える。1) イスラエル人を人質にして、捕虜交換を通じて、イスラエルに捕らえられているパレスチナ人を解放すること。2) イスラエル軍基地から武器を盗み、軍に関する情報を収集すること。3) ガザ包囲地区の一部を占拠して、人質とともに立てこもってイスラエル軍の攻撃を鈍らせ、出来るだけ長期戦に持ち込み、そのために捕虜交換の交渉を行うこと。

⁷ イスラエル軍は2008年のガザ侵攻において白リン弾を用いて国際的な批判を浴びたが、今回の戦争でも使用したのではないかという疑いがもたれている。

<https://www.cnn.co.jp/world/35212656.html#:~:text=%E3%82%A4%E3%82%B9%E3%83%A9%E3%82%A8%E3%83%AB%E3%81%AF%EF%BC%92%EF%BC%90%EF%BC%90%EF%BC%98%E5%B9%B4%E5%BE%8C%E5%8D%8A,%E3%81%8C%E6%90%8D%E5%82%B7%E3%81%97%E3%81%9F%E3%81%A8%E8%A8%80%E5%8F%8A%E3%80%82>

白リン弾とは、空気に触れている限りは燃え続ける白リンを使用した非人道的な爆弾であり、民間人に対する使用は禁止されている。

つまり、入植地を陣地にして長期戦に持ち込んで捕虜交換を実現させる計画であった。彼らは、イスラエル領内でのこの深謀遠慮に抵抗する民間人を阻止しながら、人質を解放するために長時間にわたって戦闘や交渉を行った。だが相手側のイスラエルは人質救出にはあまり熱心でなく、自国民である人質を犠牲にしてでもガザ包囲地区の奪回に熱心であった。このイスラエル側に姿勢のために、イスラエル民間人の死傷者が増えたのは否定できない。もちろん、これは、パレスチナの多くの戦闘員が命令を超えた行動をしなかったとか、全員が一致団結して行動したということの意味するわけではないが、パレスチナの軍事戦略が遅延と先送りを狙ったものであったのに対し、イスラエルの戦略は領土の迅速な回復と再生に重点を置いたものであったことを示唆している。そして、この方針が少なくとも民間人の犠牲の程度を悪化させなかったとはとても考えられない。実際、イスラエル人の生存者の多くは、イスラエル軍とイスラエル警察隊はガザ包囲地区での戦闘で人質の安全への注意を払わなかったと証言している⁸。この証言を聞いて、10・7の真実を政府に明らかにさせようと国民に呼びかける公開文書を出した市民グループがあった。

従って、イスラエルのパレスチナ民間人に対する戦争犯罪とパレスチナ人のイスラエル民間人に対する戦争犯罪の基本的違いは、西側の政府・メディアの国際的ネットワークから生まれる。そのネットワークはイスラエルの軍事行動の背後になる論理を正当化し、詳しく解説し、権威ある法典にしているのである。イスラエルの軍事行動の背後にある論理はガザの民間人大量虐殺を正当化するような無茶苦茶のものであるのに、それに正義行使という装いを与えるのである。西側やイスラエルの軍事シンクタンクの文書を読むと、例えば、市街戦は必然的に混乱し複雑になると書いている。病院など民間施設への攻撃も必要になる場合もあり、やむなく民間人死傷者が多くなる。イスラエルはこの論理を使って、国際社会にイスラエルのパレスチナ民間人殺傷に関して心の準備をさせる。この論理は西側の主流メディアにトリクルダウンし、メディアはイスラエルの組織的な破壊工作をパレスチナ人が悪いからだという論説を流し、イスラエルの残虐行為を隠蔽する。それを米国政治家（報道官）が受け継ぎ、「戦争には民間人犠牲者は避けられない」という決まり文句を繰り返し、パレスチナ人の大量殺戮を軽く扱う。そのくせ、ウクライナでロシア軍の民間人殺傷に対して大げさな恐怖を表現するのである。

ハマスは野蛮で、イスラエルは強力で米国の「民主主義的で自由主義的」な同盟国である。ハマスの暴力は冷酷で神を冒瀆するようなものだが、イスラエルのそれはきちんと計画し整然とした神聖な戦争行為で、文明国に相応しい行為である。こういう二分法的思考に侵されているため、10・7の Hamas 作戦に戦略的根拠があるとは考えることができないのである。

シャッツは10・7攻勢の軍事的論理を考えようとしないので、パレスチナ人を10・7に駆り立てたイスラエルの支配的暴力との因果関係を検討することを避ける。この回避は

⁸ イスラエルと西側はイスラエル人民間人の犠牲をパレスチナ人の残忍性のせいにするが、イスラエル軍の攻撃に犠牲になった人も多い。

ある種の知識人の間で風土病のように蔓延している。分かっているが意図的に回避しているというより、パレスチナ人の暴力抵抗の背景にある論理を論じることの問題点、特にそれを単に冒瀆的、嫌悪すべきもの、道徳的に劣悪なものとして見なす環境において、何を意味するのかについてである⁹。そんな雰囲気の中でシャッツがそれを主題に論文を書いたのには驚かされる。彼はパレスチナ人の暴力を解説しようと、政治的・社会的脈絡に触れることは触れた。しかし、触れただけで、結局それを復讐の本能という単細胞的解釈に落ち着いてしまった。

物事を道徳的に評価する場合に一番大切なことは、証拠に基づくことである。イスラエルが証拠を隠蔽したり、認めようとしなくて、デマを流しているから、このことはいっそう大切であろう。ハマス指導部が民間人殺害を指示したのであるか？ 戦士の暴走の結果だったのだろうか？ 交戦の中で巻き添えで死んだのであるか？ イスラエル軍はガザ包囲地区奪還行動のとき人質の存在を考慮したのであるか？ こういう質問を設定して答えを見つけることが、現場で本当に何が起こったかを知るうえで重要である。イスラエルが事実を覆い隠し、すべてパレスチナ人の蛮行というプロパガンダを流し、第二次世界大戦のときの連合軍のドレスデン空襲のような大規模で無慈悲な絨毯爆撃をガザ民衆に加えていることを正当化している。それは単なる道徳的判断にとどまらない。それは、虐殺を行うために、道徳的瑕疵を武器とすることなのだ。そのような犯罪的行為を明らかにする意味でも、上述の質問への答えを明らかにしなければならない。

もう一つ、シャッツの歴史類推 — 10・7攻撃をフランス植民地アルジェリアでのフィリップヴィルの戦いと同じだとする類推 — が必ずしも正確とはいえないことが、10・7行動の軍事的論理の検討で明らかになる。フィリップヴィルの戦いが民間人（ヨーロッパ人入植者）を標的にしたのと同じように10・7作戦も民間人を標的にしたという議論は、実際に起きたことを無視した議論である。繰り返しになるが、民間人が殺されなかったと言いたいのではないし、パレスチナ人戦士が民間人の殺害に関与しなかったと言っているのではない。しかし、この点を議論することは彼らの行動がどのように受け入れられたかについて何らかのことを教えてくれる¹⁰。シャッツはイスラエルのパレスチナ戦士をヒューマン・アニマルだというプロパガンダを内在化してしまったので、10・7とフィリップヴィルの戦いを抑圧者側からの視点に立って同一視したのだ。

フィリップヴィルの戦いの最も重要な結果の一つは、アルジェリアのアラブ人とフランス人入植者が妥協する「第三の道」的方向への展望が断たれたことだ。パレスチナではオスロ合意の破綻に見られたように、「第三の道」は20年前に終わっている。イスラエルの一

⁹ このような考察は、イスラエルや親イスラエル派の圧力があって、非常に困難であるからかもしれない。パレスチナ人を人間の形をした獣で、下品で野蛮な野蛮の暴力を振るう下等動物だとする雰囲気が支配している中で、パレスチナ人の暴力抵抗を学問的・科学的に論じることが困難である。

¹⁰ 問題にすべきことは、彼らの行動が歪んで解釈され、デマを交えてプロパガンダされて、イスラエルの虐殺作戦の正当化に利用されていることだ。

部の人権団体と少数派中道派が主張する非常に弱い結合で、政治的な影響力は皆無である。それが証拠に、現在イスラエルで起きている市民的反乱、ネタニヤフ極右政権の司法裁判制度の改悪に反対する運動がパレスチナに関する関心や言及をまったく示していないことほど、このことを示すものはない。

それに、どんな戦争も紛争もそれぞれ歴史的分脈の中で起きた独自のもので、現在の闘いを過去のそれと同じと類推することは、現在の闘いの理解に役立つわけではなく、そのような比較を行う人についてより多くのことを明らかにする。

10・7の影響

長年パレスチナ問題は、バイデンのパレスチナ不関与政策など、国際政治から取るに足らない問題と放置されてきたが、ハマスの10・7作戦によって、再び大きな問題として国際政治の舞台に戻ったことは、シャツツも認めるだろう。そのうえ、パレスチナ人の闘いに連帯する動きが起きて、これが地域または国際紛争に発展する可能性もある¹¹。さらに、経済的影響も深刻となり、世界経済がインフレーション圧力から回復するのが困難にしている。それに、蛇足だが、バイデンがイスラエルの虐殺を支持しているので、30歳以下の民主党支持者がバイデン離れしているので、次の選挙でバイデンが危うくなっている。

バイデンは知らないようだが、パレスチナに関して流血の長期的戦争を支持するコンセンサスはない。進歩派と左派内の市民団体、政治団体、その他様々なグループからなるパレスチナ連帯ネットワークが米国内にある。一部だが、保守派や右翼もパレスチナ支持を表明している¹²。パレスチナ・イスラエル問題では、ウクライナ戦争に見られるような親ウクライナ・反ロシアというコンセンサスがなく、意見の不一致が目立つようになった。

しかし、この点についてシャツツから得られるのは、パレスチナ人学者のヤジード・サーイエグ (Yezid Sayigh) とのEメールでのやり取りでのコメントだけである。サーイエグは昔からパレスチナ人の武装抵抗に否定的で、武装抵抗では国際社会に大きな影響を与えることは出来ないと主張していた。サーイエグは、10・7攻勢については、結果としてファシズムを促進すると論じ、1914年のサラエボや1938年のナチの水晶の夜を挙げたEメールをシャツツに送った。しかし、ヨーロッパにファシズムが生まれたのは被抑圧民族の反乱事件があったからではなく、イスラエルのファシスト政権 — 財務大臣が民族浄化を意味する「決定的計画」を公言した — の誕生は10・7以前であり、むしろファシスト政権下の苦しい日常生活が10・7の一因となったのは、明らかである。

サーイエグからの情報でシャツツはパレスチナ武装抵抗に関する論文を書いたのだが、基本的な矛盾を含んでいるのに、彼自身はそれに気づいていない。武装抵抗の政治的目標を

¹¹ イスラエルは10・7の背後にイランの関与があるとしてシリアを空爆、イランのイスラム革命防衛隊の顧問サイド・ラジ・ムサビを殺害した。レバノンのヒズボラもイスラエルと戦闘、イエメンのフーシ派もイスラエル船舶を攻撃。米軍がイラク空爆。アラブ諸国では民衆が自国政府にイスラエルと敵対せよと政府に要求している。

¹² : これはパレスチナ人の闘いの支持ではなく、それを利用した反ユダヤ主義である。

見つけ出そうと書き始めたのに、結局「復讐の病理」に矮小化し片づけてしまった。歴史的類推をしながらベトナムの「テト攻勢」との類似を避け、歴史的・社会的議論を避け、ただ「暴力嫌悪」だけを強調した。彼の論調はつじつまが合わない矛盾したものだ。10・7攻撃は政治的目的をもって行われ、実際、これまで閉ざされてきた政治的スペースを開いた闘争なのか、それとも合理性のない野蛮で、復讐感情だけに動かされた闇雲な攻撃なのか、一体どちらなのだ。

イスラエルの諜報と防衛の強固な壁の裏をかいた見事な戦略的「策略」は、ハマス等が計画的軍事行動を行ったことを示している（シャツもそれを認めているが、戦士たちが暴走して野蛮で冷酷な暴力事件となったと非難する）。その影響は大きく、地域で10・7に連帯する動きも活発になり、イスラエルと米国はその対応に苦慮している。地域では、イスラエルが合理的で優秀で強力な戦略国家だというこれまでの評判が崩れつつある。イスラエルは自国イメージの再建に必死で、そのためますますNATOの資源と力に依存するようになった。その結果、NATOの米国同盟国がイスラエルの政策に影響力を与えるようになりつつあるが、彼らは必ずしも米国と同じ姿勢ではなく、イスラエルのガザ戦争の拡大と長期化政策を歓迎していない。今のところ表面的にはイスラエルは「報復」以外に具体的な戦争目的を公式に明らかにしていない。イスラエルを訪問したブリンケン国務長官はネタニヤフには出口戦略がないとことを確認した。

最後に、何故イスラエルの中枢神経 — 抑止力と軍事力 — が攻撃されたという屈辱的経験から、軍事的支配ではない政治的解決へ向かう新しい道へ向かわないのであろうか？ 戦闘の真っ最中でイスラエルが狂気のジェノサイド熱に冒されているときにそんな展望が生まれるわけがなく、どういう未来になるかは現場の戦闘が決定する。この点に関してはシャツの論文はまったく説得力がない。彼は10・7の事後に生まれるかもしれない可能性の考慮を捨てている。

10・7の政治的効果や軍事的論理の検討を避けて、単なる「復讐」劇にしてしまったシャツは、戦争や武力衝突というものは、いくら残酷で、いくら多くの死傷者が出、いくら悲劇的なものであっても、そこから新しい可能性 — 希望に満ちた可能性も含めて — が生まれるかもしれないという展望を、まったく無視している。彼はデストピア的観測に終始し、パレスチナと世界の未来を暗いものと述べている。それは当たっているかもしれない。結局、すべての人が廃車となり、植民地本国のイスラエルがユダヤ民族・ユダヤ教中心の国家機構を脱構築することもない。シャツの論文内容自体がそのことを物語っている。イスラエルを含む西側世界は支配と覇権を維持・強化しようと、ファシズムへ走る気配が濃厚である。しかしこの考え方は、パレスチナ人が経験し認識している世界を無視している。すなわち、イスラエル人がファシスト的権力が保障する安全と安心の中で生活する限り、パレスチナ人の苦境を変える意志は生まれてこないと経験的に考えている。

たとえ一時的にせよ、パレスチナ人が抵抗戦争で相対的な勝利を得なければ、パレスチナ人は黙って徐々に死んでいる運命に支配されたままになっていたであろう。

暴力とファノン

シャッツがパレスチナ人の暴力に関してフランツ・ファノン (Frantz Fanon) を取り上げたことを述べる必要がある。ファノンは『地に呪われた者』の中で、植民地の被抑圧先住民の暴力は一種のカタルシスになり「自己認識」(シャッツはこれを「解毒作用」と表現する)になり、単なる暴力行為ではなくて従属という汚物を洗い流す変革儀式だと述べている。しかし、シャッツはファノンが必ずしも暴力賛美者ではなかったことを、慌てて述べている。ファノンは、植民地解放闘争の勢力が解放後の新国家で新しい抑圧者となり、植民地時代の統治ヒエラルキー構造を再生させるという悪夢を述べている。ファノンが脱植民地闘争の中の暴力の役割を慎重に述べているとシャッツが指摘したのは、それ自体は正しい。実際、ファノンは暴力の心理的効果だけをニヒリスティックに称賛する態度 (nihilistic celebration) を戒めている。それは暴力が暴力を行使する人々に与える有害な影響を与えることを覆い隠すからである。

シャッツはそのことを正しく指摘したけれど、ファノンの論述全体に忠実だったわけではない。ファノンは民族意識という幻想に警告したばかりでなく、民族主義よりもっと広い人間的・社会主義的地平への弁証法的変革を唱えた。暴力の暗い影にもかかわらず、暴力は植民地主義と闘うという範囲内で必要であり、植民地支配構造を解体するうえで不可欠な戦略的・政治的ツールと位置付けた。シャッツはそれを読んだはずだが、パレスチナ人のレジスタンスの解釈にそれを読み込んでいない。

ファノンの解放論は彼自身も闘った解放運動の実践に深く根差している。外から思い付きに解放戦士の行動の評論や批判を行ったわけではない。解放戦士の同志として、運動の可能性と陥り易い落とし穴を指摘する、内部からの批判的考察を行ったのである。もっと重要なことは、ファノンの解放論は被抑圧先住民の入植者植民地主義からの解放だけでなく、植民地を支配する本国それ自身の解放も視野に入れていることである。それが彼の解放理論の心髄である。

このような解放理論に基づいて我々パレスチナ人のレジスタンスを論じて欲しい。民族浄化に対する戦い、パレスチナの郷土を取り返す闘いであると同時に、世界の各地でも通用する人間解放の普遍主義的解放闘争である。ヤジード・サーイェグやアダム・シャッツのような人物は、10・7暴力がファシズムを促進すると論じたが、同時に10・7はもっと広い人間解放への未来へ向かう道を開拓する可能性を秘めている。確かにパレスチナ解放闘争には不完全な点が多くあるが、いい加減な評論以上のものを必要としている。それはおおきな普遍的意味を内包している。西側知識人がパレスチナ解放闘争に無関心を装ったり、暴力非難を行っているが、その底にはパレスチナ解放闘争のあからさまな否定、軽蔑とまではいなくても、何か獣の襲撃みたいに見下す姿勢がある。

パレスチナ人は西側知識人が敷いた既定の運命を受け入れなければならないのか？ もし心の中でそう思っているなら、正直に、勇気を出して、そう言ったらどうだ。パレスチナ

を政治的に殺害し、イスラエル年代史の脚注のように扱いたいのであれば、はっきりそのように言えばよい。

10・7事件はパレスチナに内部のネクロシス(壊死)の表現にすぎないという解釈は、西側知識人が望む解釈であろう。しかし、我々パレスチナ人が望む世界は、パレスチナ人の存在を、いやすべての人々の存在が大切にされる世界で、その実現を目指して闘っているのだ。それを「壊死」だとかその他いろいろ否定的に表現したければ、好きなようにやればよい。そんなことは、これまでの歴史で何度も経験してきたことだ。